

大学史展示室特集展 10

駒沢にオリンピックがやってきた

— 1960年代の駒澤大学 —

会期 平成20年5月7日(水)～7月25日(金)

場所 駒澤大学禅文化歴史博物館2階 大学史展示室

主幹 駒澤大学禅文化歴史博物館 大学史資料室

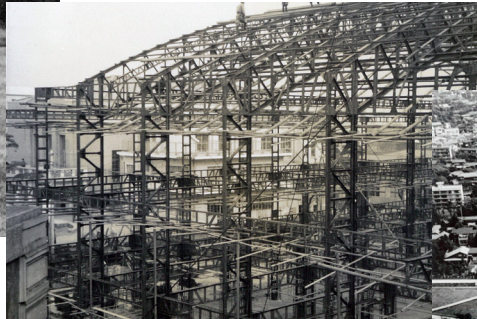
本学は、昭和39(1964)年のオリンピック東京大会の第2会場として使用された「駒沢オリンピック公園」と隣接しています。そのような立地からか、大学の歩んできた歴史の中でも、オリンピック東京大会との切っても切れない関係をふりかえることができます。

昭和35(1960)年、池田勇人内閣は「国民所得倍増計画」を打ち出し、日本は高度経済成長期に突入しました。国民の生活水準が急激に上昇し、第1次ベビーブーム世代が18歳となる昭和41～43年は大学への志願者が急増し、この受け皿の1つとなったのが私立大学でした。本学でも学部・短期大学・教育機構の整備、北海道教養部(平成11年廃止)などの校地拡充を行いました。そのため、昭和37(1962)年には3,993人だった学生数も、昭和40(1965)年には、10,840人と激増しました。大講堂兼体育館は、多年待望の施設で、開校80周年記念事業の一環として計画されました。

今回の特集展では、オリンピック開催の年にあたり、1960年代の本学の体育館建設とオリンピック東京大会との関係にスポットを当て、展示を行いました。



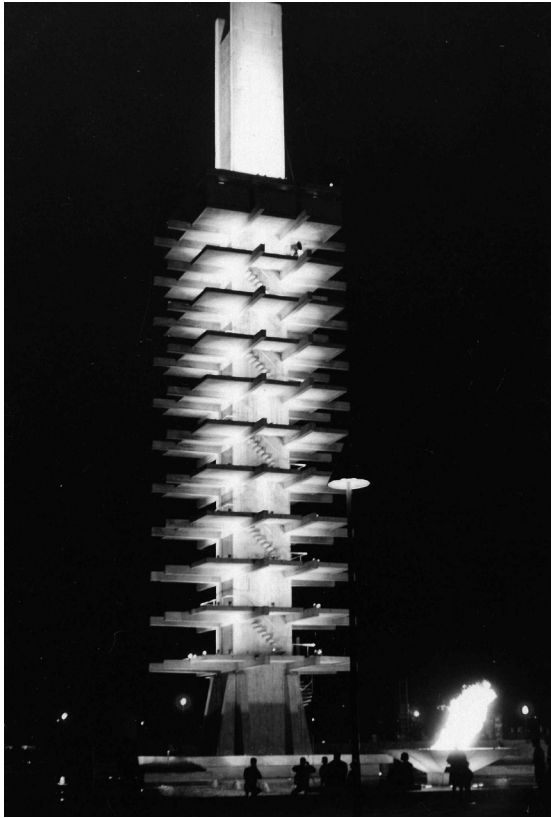
駒沢ゴルフ場(大正11年)



建築の体育館(昭和38年)



駒澤大学と駒沢オリンピック公園
(昭和39年)



管制塔(オリンピック記念塔)と聖火(昭和39年)



仏像制作に当たる難波孫次郎(昭和39年)



体育館でのバレーボール練習風景
(オリンピック東京大会当時)(昭和39年)

I 体育館の建設

昭和 38(1963) 年 7 月、幸一社古賀建築事務所の設計、株式会社熊谷組の手で工事は始まりました。この年は、第 18 回オリンピック東京大会の前年にあたったため、各国代表のバレーボールの練習場として使用できないかとのオリンピック東京大会組織委員会からの要請がありました。構造は、鉄骨鉄筋三階建 8,019 m²で、昭和 39(1964) 年 5 月 30 日、落成式が行われました。オリンピック東京大会開催中は、ソビエト連邦、アメリカ合衆国のバレーボール選手の練習場として使われました。

II 体育館の三尊仏

本学の入学式、卒業式に欠かせない体育館の三尊仏(釈迦如来、道元禪師、瑩山禪師)は、日展審査員の難波孫次郎の作です。当時の新聞記事によると、大学が仏像を安置する須弥壇を体育館に設けたのは、オリンピック協賛事業としてであり、日本古来の仏教美術を世界各国の人たちに披露しようという目的もあったようです。

III 駒沢オリンピック公園

航空写真では大学の敷地と勘違いしてしまいそうなほど隣接していて、学生にとっても憩いの場である駒沢オリンピック公園は、昭和 39(1964) 年の第 18 回オリンピック東京大会の際、第 2 会場として整備されました。陸上競技場、体育館、屋内球技場、球技場、野球場などを併設していて、オリンピック記念塔や聖火の灯された池から往時をふりかえることができます。